The Japan Association of College English Teachers (JACET)

Sep. 8 (Wed.) 15:00-15:25 CASE 404

Field /分野 : Curriculum

杏林大学の英語教育効果測定: TOEIC®テストの効果的活用の試み

Evaluation of English Skills at Kyorin University: An Effective Use of TOEIC® Test

高木　眞佐子、岩本和良、倉林秀男（杏林大学）

《研究の背景》　外国語学部の必修プログラム、使える・話せる「実践英語習得プログラム（PEP)」は、英語圏に偏らないインターナショナル・イングリッシュを目指して2006年にスタートした。１年生で徹底的なオーラル訓練、２年生でディクテーションに続く読解訓練を全ての学生に課することにより全体の底上げをするとともに、大学教育で必要最低限の英語力を確保することを目的としている。しかし、単に授業を組み合わせるだけで、学生の英語の実力が上がるわけではない。発表者は2008年に１度カリキュラムの見直しを行ったが、時間数や宿題の与え方などを見ても、まだ問題は山積しているのが実状である。

現在外国語学部に入学する多くの学生の実力はTOEIC®テスト300点程度で、これは日本の高校卒業生の実力としては平均的なものであろう。しかし英語を活かして一般企業に就職するには600点、英語をビジネスの現場で使用できるレベルが730点といわれる中、不本意ながら420点程度で卒業を迎える学生も少なくないし、いつまでも受信型英語から脱却できない学生も多い。どうやって学生の意欲を継続的に高め、実践的に使える英語の実力を高めていけるのかは大きな課題だ。

外国語学部では全１，２年生を対象に年２回TOEIC IP®テストを実施している。今回、実施団体の国際ビジネスコミュニケーション協会が、過去４年間蓄積したデータの解析に協力してくれた。客観的かつ公正なテスト分析から「実践英語習得プログラム」改良の方向性が明瞭に見えてきた意義は大きい。

《発表の趣旨》　大学英語教育では学生の実力に見合った具体的なミッションを与えること、英語の授業時間数を自宅学習も含め消化させること、そして何より個々の英語の授業の総体が学生本人の英語力に集約されると理解してもらうことが大切であろう。

今回、学生のTOEIC® IPデータを総合的に分析した結果、ある時期に急にスコアが伸びる学生は、英語の勉強時間が合計として増えている可能性が高いことが分かった。これはスコアのデータには表れないが、学生の履修している英語科目数にスコアを重ねると見えてくる。一方、停滞する学生は【点数が低い→モチベーションがあがらない→

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

勉強をしない→再び点数が下がる】、という悪循環を繰り返した結果、英語科目の積極的な履修を放棄してしまう傾向が強かった。本発表では、TOEIC® IP データと学生の履修科目を組み合わせ、それに基づいて学部全体の傾向、スコアが伸びた学生の傾向、伸びない学生の傾向をそれぞれまとめた。この結果を元に ①本人の英語力に見合った負荷の設定、②英語の自習学習をさせるために授業でできる工夫、③上手なモチベーションの掻き立て方を模索しつつ、次世代の英語カリキュラムを考えていく。

《分析方法》 「実践英語習得プログラム」ではTOEIC® IPテストを年2回、4年間継続的に実施してきた。その結果、各学年およそ220名が2年間に伸ばした英語力が蓄積されている。この880名の膨大なデータを学生一人ひとりの特性や「実践英語習得プログラム」以外の科目の成績などと組み合わせた。各学生が履修した科目も全て把握し、どのような授業の組み合わせの学生に一定の上昇・下降傾向が見られたかについて検証を試みた。また留学した学生の留学前、留学後のスコアをそれぞれ抽出することによっても示唆的な結果が得られた。さらにネイティヴ教員に消極的な学生も少なくないので、ネイティヴ教員の授業履修とTOEIC® IPスコアの伸びとにどのような相関関係が見られるのかについてもシラバスと照合し比較した。

《予想される展望》 「学問に王道なし」とはよく言われるが、大学で個々の学生が主体的かつ継続的に英語の勉強をするためには、英語科目全体のコーディネートがやはり重要である。それぞれの教師が好き勝手に展開する授業では、どうしても目的意識が希薄になるからだ。まず、それぞれの授業時間数を消化し宿題も1時間半は確実にこなさなければならないという、「時間数重視」を最低ラインとして押さえてはどうだろうか。そしてこれにレベルの適合性を組み合わせることが肝要である。平易なリスニングに自信をつけさせる「実践英語習得プログラム」従来のやり方は一面効果的であったものの、その分学生はリーディングのハードルを高く感じていた。1年次から「読む力」を総合的に捉え、そのレベルの学生がもっとも必要とする課題に対して多くの負荷をかける方法を新たに模索する必要があろう。予習復習時間を充分に取る方針と組み合わせ、すべてのレベルの学生が、早くかつ正確に多くの英語に対処できる能力を高められるプログラムの考案が求められている。レベル別指導の必要性はリスニングも同様だ。

客観性の高いTOEIC® IPテストの活用により、教師が学生の実力に臨機応変な対処ができるようになったことは意義深い。300点と600点の学生を同じ教室に押し込めても無理があるが、レベル分けをしたクラスごとにどう授業内容を変えるかも重要なポイントである。学生のレベルに見合った授業体系をシステムとして確立していくことが肝要ではないだろうか。杏林大学の英語教育も、Stephen Krashen の“i + 1”を教室で実践するためのメソッドを確立すべき時期に差し掛かっているのかもしれない。レベル別学習の土台作りを進めてこそ、真に使える実践的な英語を実現する準備が整うのではないだろうか。

NII-Electronic Library Service